四

「熱い」

そう怒鳴って、黄文柄は器の茶を桌にぶちまけた。

心が落ち着かなくて仕方がなかった。

「魯櫂の奴め。儂を巻き込みおって」

そう独り言を言っては、落ち着きなく辺りを見回していた。従者がまかれた茶を慌てて拭き取っていた。黄文柄は従者のしぐさにまで腹がたった。何もかも面白くなかった。まさか禁軍まで敗れるとは、思ってもみない事態だった。禁軍の都監が二人も死んだ。都虞候も二人犠牲になった。兵士にいたっては三百を超える死者を出した。考えられない失態だった。賊は初め、数人しかいなかった。黄文柄は、魯櫂の屋敷で起こった惨事の報告を自分の耳で聞いたのだ。その時は、曹瑛という太原府在住の娘、その隣に住んでいた蒋唐という商人、そして何故か袁偉、この三人だけだったはずだ。それに黒旋風李逵と正体の分からぬ大男が加わり、全員でも五人の集団だったはずだ。それが廂軍を蹴散らし、さらに二人の若者が加わり南門を占拠されてしまった。ここが決定的な失策だった。禁軍と廂軍がもしも連携して押し込めば、七人しかいない奴等など簡単に捕らえることが出来ただろう。日頃の連携の悪さが、こんな時になって決定的な失敗となって現れたのだ。奴等は動きもままならぬ宋雪華を抱えていたというのに。悔やんでも悔やみきれない失態だった。

そして、禁軍騎馬隊との激突だった。事後の報告を検証すると、やはり黒旋風の存在が大きいようだった。まさか生きているとは思わなかった。生き残った兵達は等しくそう証言していた。間違いなく黒旋風だったとも。確かに、黒旋風が根城にしていた銅提山は太原府に近い。黒旋風を見知った兵は多いだろう。それにしても、と黄文柄は思った。黒旋風が絡んでいることを、何故魯櫂は見抜けなかったのだろうか。魯櫂の失態だ。とどのつまり、この事態は黄文柄の失策ではな

く、魯櫂の失態によって引き起こされたものだ。黄文柄の頭の中では、そうして自身の責任を放逐しているのだった。そこには、高潔たるべき進士及第の士大夫の姿など、薬にしたくともなかった。

「経略使の杜愔を呼べ」

黄文柄は従者に命じた。

二刻ほどして杜愔がやって来た。戦袍に身を包んではいたが、鎧兜はつけていなかった。大柄で顔の下半分は硬そうな髭で覆われていた。禁軍駐屯部隊の最高責任者らしい、堂々たる押し出しだった。

「何か」

杜愔の声は低かった。

「呼び出して申しわけない」

黄文柄はまず謝した。太原府の最高位は当然のことながら知府である黄文柄だが、経略使ともなれば、都監のように粗略に扱うことは出来なかった。地方駐屯禁軍の最高位というだけでなく、開封府と直接繋がっているからだった。

「準備はどの程度まで進んでおられるのか」

黄文柄の声は威圧的なものではなかった。

杜愔は少し考える素振りをし、やがておもむろに口を開いた。

「先遣隊はもう着いているものと思われます。今は、亀伏山の砦の周辺を調べているところでしょう。これから、本隊を送り出します」

「どの程度の兵数で」

「太原府駐屯禁軍の総数は八千です。騎兵三千、歩兵五千です。このうち騎兵千は先の事件で数を減らしました。生き残った兵も暫くは使えぬでしょう。騎兵は千を、本隊の歩兵は三千を出します」

「併せて四千もか」

黄文柄は驚きの声を上げた。

「騎兵千が手玉にとられたのです。今度は失敗が許されませぬ。遼兵のことを考えて兵を残しますが、本当は全軍で出動したいくらいです」

杜愔の顔には、名誉ある禁軍の誇りが踏みにじられたことへの、怒りが垣間見えた。

「遼兵か……」
黄文柄はそう言って黙り込んだ。思い出したくもなかった。あの日、蒙重の部隊を潰走させた遼兵は、そのまま南門を抜けて城郭の中に乱入してきた。太原府の城郭内は、騎馬の進入に備えて丁字路になっている。北漢を滅ぼした時に、そう城郭内を造り直したのだった。だが、それも役にはたたなかった。百人ほどだったという。凄まじい速さで宮城の門を蹴破って突入してきた。従者のなかに機転の利く者がいて、黄文柄は厩の秣の中に押し込められた。宮城のあちこちで、遼兵の怒鳴り声が聞こえてきた。黄文柄は生きた心地がしなかった。膝は震え、歯の根は合わず、秣の中で嵐の過ぎるのを待つだけだった。幸い馬はどれも鈍感で、突然の闖入者に対して、警戒することも騒ぐこともなかった。一刻も経っていなかったというが、黄文柄にとっては永遠の責め苦のように感じられた。やがて遼兵は城外に出て、そのまま北の方に去って行ったということだった。
あの時のことは、思い出すのもおぞましかった。従者のなかに遼の言葉が分かる者がいて、最後に遼将が言っていた言葉を聞かされた。宋雪華が死んでいたら、太原府を火の海にしてやるところだった。そう叫んでいたらしい。太原府を火の海にされなかったのは不幸中の幸いだったが、これで宋雪華と遼との関係は明らかになった。やはり、遼の手引きをしていたのだ。あの娘は反逆者だった。危うく自分も騙されるところだった。あれが演技だったとは思えないが、ああまで身体を焼かれてそれでも白状しなかったことには恐れ入った。筋金入りの反逆者ということか。それがあれだけの美しい娘だったということに、黄文柄は底知れぬ恐怖を感じるのだった。
「四千なら、よもや失敗することはないな」
「おそらく」
杜愔の言葉は短かった。
「分かった。将軍の言葉を信じよう」
黄文柄は鷹揚に肯いた。
杜愔は立ち去ろうとして、思い出したように黄文柄に訊いた。

「ところで知府様。開封府に応援を求めてはおられないでしょうな」
杜愔の目は、鋭い光を帯びていた。
「まさか。将軍を信頼しておる。太原府のことは太原府でかたをつける。それが一番であろう」
黄文柄は、心の中で舌打ちした。気付かれたか。まったく、油断のならん男だ。
「それならよいのですが」
杜愔はそう言い残して、今度こそ執務室から出て行った。
開封府にはすでに使者を出していた。それが禁軍経略使の杜愔にとって、甚だ不名誉なことなのは分かっていた。しかし、杜愔の立場を考えている余裕はない。こんな事態が長引けば、開封府から譴責されるのは自分だった。そうなれば、今の自分の地位すら危ない。太原府のように大きな城郭の、知府の座を狙っている者は大勢いる。せっかく掴んだこ掴の地位だった。杜愔ごときに気を遣って、失点を重ねるのはごめんだった。
「馬鹿者が。おまえ達武官がしっかりせぬから、このような事態になるのだ。儂を危険な目に遭わせおって」
黄文柄は、杜愔の背に毒づいた。

・・・・

「そうか、それは非道なことを……」
陳達が聞起の話を聞いた後、そう呟いた。
「そうさ、雪華姉ちゃんは何も悪いことをしてないのに、魯櫂と黄文柄の奴らが罠に嵌めたんだ。ひどい奴らさ」
聞起の口振りは、いつの間にかもとに戻っていた。
「おまえはよほど宋雪華を慕っているようだな」
「そうさ。雪華姉ちゃんがいなかったら、俺達全員、三年前に死んでいたんだ。もちろん、それだけじゃないけどね」
「俺も早く会いたくなってきた。おまえの姉ちゃんに」

陳達は白い歯を見せて笑った。
聞起は陳達の頼もしい姿を見て、仕事をやり終えた充足感に浸(ひた)っていた。李逵の弟子ということでは嘘をついてしまったが、そのことは出来るだけ考えないようにしていた。実際、あながち嘘とも言えなかった。流星錘だけは阿骨打(あぐだ)に習ったが、拳や剣などの武術の基礎は李逵に教えられたものだった。それ以上に、漢(おとこ)の生き様(ざま)を教えてもらった。そう聞起は思っていた。黒旋風李逵。今やその名は、父以上のものに聞起には感じられた。小父さんに恥ずかしいところは見せられない。聞起はそう思うようになっていた。
「数が少なくて済まんな」
陳達が詫びるように言った。
「十分だと思いますよ。李逵小父さんは、二百人いればと言っていたから」
陳達の部下は、およそ三百人といったところだった。けして多いとは言えないが、それでも李逵の予想より百人は多かった。
「蘇源の部下は何人残った」
「十五六人だと思うよ」
「そうか、それだけしか残らなかったか」
陳達の声には、深い哀悼の意が込められていた。
「蘇源は漢らしく死んだのだろうな」
それを確信しているような口振りだった。
「俺は見ていないんです。蘇源さんのことは、李逵小父さんか曹瑛に訊いてみてください」
「曹瑛というと、おまえの話にあった娘の一人だな」
「ええ。凄く頭の切れるやつです。俺達五人のなかでは一番頼りになるやつだろうな。黄玉は猪突猛進だし、陳統はひょうきん過ぎるし、石勇はいじけてる」
「何だ。それではおまえの仲間は頼りにならんではないか」
陳達が大笑いした。
「いけね。そんなんではないんです。本当は皆、凄く頼りになるやつ

等なんです」
聞起が慌てて訂正した。
「分かっている。そんな頼りない連中が、これほどのことを成し遂げるとは思えん。黒旋風の兄貴がいたとしてもな」
それを聞いて、聞起は胸を撫で下ろした。つい仲間の悪口を言ってしまった。反省しなくちゃ。こんなことを黄玉に知られたら。聞起は首の辺りに冷たい風を感じた。
「風が出てきたな」
陳達の後ろから声が聞こえてきた。
「頭領、風が強くなったら厄介ですな」
漢達の一人が陳達に言った。
確かに風を感じるようになってきた。この辺りは草木がほとんどない。
風が強まれば、まともに黄砂を喰らうことになる。季節もちょうど黄砂の多い時期だった。この辺りでは、汾水の岸も厚い砂の層になっていた。黄砂の嵐に飲み込まれたら、いかに朧月でも歩を進めることは出来ないだろう。
「急ぎましょう」
聞起の言葉に、陳達は黙って肯いた。

・・・・

「あなたは本当に馬鹿なんだから」
曹瑛は珍しく大声を上げていた。
「曹瑛、おまえにそう言われると、わたしは本当に馬鹿に思えてくる」
黄玉の声は、心なしか言いわけじみていた。
「あなたが動けなくなって、皆がどれほど迷惑すると思うの」
「それはわたしも考えた」
曹瑛は、ふっと息をついた。
「いいの、黄玉。つい、あなたを責めてしまったけれど、本当は感謝

しているの。雪華姉さんに皮をあげてくれてありがと。」
曹瑛はそう言って、黄玉の手を握った。暖かい不思議な温もりが、曹瑛の掌から黄玉の全身に拡がりだした。雪華がいつか言っていた。曹瑛の手には不思議な力があると。これがそれか。黄玉はその温もりを、ただ無心に享受していた。
「わたしがあげたかったんだけど」
曹瑛は少し哀しそうな顔をした。
「でも、血が合わなかったの」
黄玉が驚いて曹瑛の目を見た。
「こっそりと雪華姉さんの指を刺して、わたしの血と混ぜてみたの。でも、すぐに固まってしまったわ。それに、雪華姉さんの皮の色はわたしとは違うし。やっぱり黄玉、あなたじゃなければいけなかったのよ」
黄玉は、何と言っていいか分からなかった。曹瑛も自分と同じことを考えていた。見た目は優しそうでおっとりと見えるが、いざとなれば驚くほど芯の強いところを見せる。それが曹瑛だった。
「曹瑛、済まない。おまえの気持ちも考えず、わたしが先走ってしまった」
黄玉は素直に謝った。
「いいのよ、黄玉。あなたの気持ちは、誰よりもわたしが知ってる」
「許してくれるか」
「許すも何も、わたしでは駄目だったのだから」
「だが、おまえの気持ちが……」
曹瑛は黄玉を遮った。
「黄玉、あなたの痛みはわたしも感じているわ。あなたはそうして、痛みに耐えている。公孫勝様から聞いたわ。人が耐えうることを超えていたって。だからわたしは言ったの。黄玉ならやるわって」
二人は笑いこけた。
「曹瑛、訊いてもいいか」
黄玉が急に真顔になった。

曹瑛は少し身体を震わせた。
「何を……」
曹瑛の声には、微かな震えが混じっていた。
「何があった」
黄玉の声が、鋭く曹瑛の胸に刺さった。
「何がって……」
「曹瑛、わたしに隠し事が出来ると思うか」
曹瑛は黄玉から目を逸らした。
「幼い頃から一緒にいたのだ。おまえに何かが起こったのぐらいは、わたしにだって分かる」
「黄玉、相変わらずね」
「おまえとわたしの間だけの話だ。二人で、雪華姉様にどこまでもついてゆこうと約束したではないか」
「そうね、その気持ちは今でも変わらないわ」
「曹瑛。わたしはずっとおまえが羨ましかった。おまえは頭がいいし、美しい。雪華姉様がおまえを太原府に遣った時、わたしは悔しかった。わたしはおまえのように数に強くもないし、書もおまえほどは読めぬ。だから、自分に出来ることは何かと考えた。それで剣の修練をした。わたしに出来ることはそれだけ。そう思ってきた」
「黄玉……」
曹瑛は俯いたまま、黄玉の手を包んでいた。
陽は中天に昇りつつあった。窓の外から、柵の補強や石積みの音が流れ込んでいた。曹瑛は顔を上げた。
「羨ましかったのはわたし。黄玉は綺麗で、そして強い。でも、一番羨ましかったのは、雪華姉さんが黄玉を頼りにしていたこと。この二人の間にはとても入れないって、わたしは何度も思ったの。特にそう、二人で剣の練習をしている時なんか、二人とも本当に楽しそうで、見ているのが辛かった。だからわたし、武術の練習が嫌いだったの。それは雪華姉さんと黄玉のもので、わたしの入るところなどないんだって。馬鹿よね。そんなに嫌っていた武術しか、助けてはくれなかった。

どんなに頭で考えても、どんなに言葉で訴えても、力しか通用しないことは確かにあるのよ。だから、わたしも力をつけなくてはいけなかったの。わたしにもっと力があれば、蒋唐小父さんを死なせずに済んだかもしれなかったのに」

曹瑛の目から、一粒の涙が零れ落ちた。

「ああ、おまえによくしてくれたという人だな。残念なことだったな。だが、曹瑛。戦には頭がいるし、運も大切だ。わたしも大きな戦は今度が初めてだった。武だけでは、出来ることは限られている。李逵様の戦いぶりを見て、わたしはそう思った。考えに考えて、その後は全力で武をふるう。そして結果は運に任せる。戦というものは、案外そんなものなのかもしれぬと感じたのだ。だから頭も大事なのだ。頭ではわたし達五人、誰も曹瑛には敵わない」

「黄玉、あなただって。それに聞起もいるわ」

「聞起……あれは単純だ。難しいことには向いてない」

曹瑛はくすりと笑った。

「黄玉、あなたがそう言ってくれるのはありがたいけど、やっぱりわたしには自信がないわ。もっと強くなりたいし、色々学んでもみたいの。そうして、蒋唐の小父さんの時みたいなつらい思いをしたくないの」

「曹瑛なら出来る。わたしも聞起も、おまえを信頼している」

「黄玉……」

曹瑛が真剣な目で黄玉を見た。

「あなたにだけは言っておくわ」

「どうした」

黄玉もただならぬ気配に緊張した。

「わたしは……わたしの身体は……」

曹瑛は戸惑っていたが、ついに決心したようだった。

「わたしの身体は汚れているの」

黄玉は驚いたまま、何も言葉が出なかった。

「どうしようもなく汚い男に、わたしは汚されたの」

曹瑛は、そう言ったまま黄玉の手を握り締めた。
曹瑛の手から伝わっていた温もりが、ふいに冷たい氷のように感じられた。
「曹瑛……それは……」
本当のことかと言おうとして、黄玉は口を噤んだ。嘘を言うような曹瑛ではない。そんなことは、誰よりも黄玉が知っていた。
「黄玉、わたしはもう大丈夫。あなたや聞起と違って、自分にあまかったことへの罰だと思うわ。これでもう、女として普通に生きようとしていた、あまい自分にはさよならだわ」
曹瑛はそう言って、黄玉に微笑んだ。だが、その微笑が痛々しく見えて、黄玉はまともに曹瑛の顔を見ることが出来なかった。
「その男は」
「時遷という人が教えてくれたわ。蒋唐の小父さんが殺していたらしいの。わたし達が魯櫂の屋敷に入る前に。小父さんは、そんなこと一言も言ってなかった。何も言わずにわたしのために……」
曹瑛は、いきなり黄玉に抱きついた。嗚咽が聞こえた。堪えに堪えていた感情が今、一時に溢れ出したようだった。小刻みに震える曹瑛の背を撫でながら、黄玉はやり場のない怒りに身が引き裂かれそうな衝動に駆られていた。

・・・・

目を開くと、見知らぬ男と黒い道服を着た女が見えた。
「誰……」
意識はまだ完全ではなかったが、頭の中に居座っていた白い靄のようなものは消え去っていた。ぼんやりとしてではあったが、優しげな顔の男と、いくつぐらいか分かりにくい女の顔が見えていた。
「目が覚めたかな」
男の声だった。その声は、大きくもないのに不思議と雪華の胸に響きわたった。

「宋雪華、天魁の星よ」
重々しい声が響いた。だが雪華には、その声が威圧的には聞こえなかった。労わるような、あるいは励ますような。何か不思議な安らぎを与えてくれる声だった。母の声。そう、もしも母が生きていたら、たぶんこんな声だったのだろう。ぼんやりとした意識の中で、雪華はそんなことを考えていた。
「あなたは……」
意識は少しずつ鮮明になってきた。
「宋雪華。私は九天玄女。この男は公孫勝、医師だ」
「九天玄女様……女神の」
「もちろん、本名ではない。本当の名はとうの昔に捨て去った。今はただ九天玄女と名乗っている。特別な意味はない。黒の道服が気に入っただけのことだ。もっとも、信仰の中の九天玄女は煌びやかな服を纏った美女だがな。名だけ貰ったということだ」
雪華は気持ちが軽くなった。いきなり説教されたら辛いなと思っていたからだった。それでも、ある種の威厳のようなものは感じられた。優しそうな眼差しの奥に、誰も入って行けないような、そんな孤独の色を雪華はおぼろげに感じていた。
「それでは玄女様、なぜここに」
そう言いながら、雪華自身ここがどこなのか分からないことに気が付いた。あら、ここはどこなのだろう。雪華は起き上がろうとした。
「いた……い」
雪華は起きようとして、痛みのために再び牀に横たわった。
「雪華殿、まだ動いてはならぬ。傷が開いてしまう」
公孫勝が、慌てて雪華の肩を抑えた。
「傷といっても火傷の傷だから、塞がることはないのでしょう」
雪華は力なく呟いた。
「いや、ある程度は塞がる」
公孫勝の声は自信に満ちていた。
「どうして……」

「雪華殿には無断で済まなかったが、医術を施させてもらった」
「医術、火傷に」
「そう。私は移植と呼んでいる」
「移植……」
公孫勝が手を離した。もう不用意に動くことはなさそうだった。
「移植というと……皮を移し植える」
「そう。雪華殿の傷に皮を移した。もちろん、傷の総てを覆うことは出来ぬが」
「わたしの……皮をですか」
雪華は恐々公孫勝に訊いた。分かってはいるが聞きたくない。そんな様子だった。
「雪華殿の思っている通りです」
公孫勝の言葉が冷たく響いた。
「では他人(ひと)の……」
公孫勝が黙って肯いた。
雪華は目を閉じて、何かに耐えているようだった。
暫くして、雪華が口を開いた。
「黄玉ですね」
「そうだ。薬も飲まず、痛みに耐え抜いた。見事なものだった」
公孫勝は心底感心しているようだった。
「他にも耐えた者はいたのですか」
「耐えようとした者は少なくなかった。だが、あそこまで身動き一つしなかった者は、あの娘だけだった」
「黄玉らしい」
ふっと笑った後、雪華の目から大粒の涙が流れ落ちた。
「わたしは……わたしは黄玉を傷付けてしまった」
九天玄女は雪華の手を握った
「宋雪華よ。泣いてはあの娘の気持ちが無になるではないか。それにな、あの娘の美しさは、身体に傷が付いた程度では損なわれぬ。あの娘、天貴の星の美質はな、外見(そとみ)よりも心にあるのだ。外見の美しさは

な、時とともに喪われていくが、心の美しさは衰えぬ。心がけ次第だがな」
そう言って、九天玄女は雪華に微笑んだ。その微笑は、雪華の心に優しく染み込んできた。
「悲しむことではない。黄玉は自ら望んで皮を与えたのだ。痕が残るだけではなく、身体を動かすのにも支障が出るからだ。背と脇腹の二箇所ずつに皮を移植した。胸は諦めてくれ。黄玉は乳首も移植してくれと言ったが、乳首のような特別な部分の移植はほとんど成功しないのだ。それに、背や脇腹ほど動きの妨げにはならぬ」
「同じように動けるのですか」
「少し時間はかかるが、大丈夫だ。ただし、皮が合えばだが」
「合いそうなのか」
九天玄女が訊いた。
「血は合いました。皮もおそらく。血の管も縫い合わせたので、仕上がりも綺麗になるかと」
「血の管は難しいと言っていたが、うまくいったのか」
「うまくやらねば、黄玉に会わす顔がありません。この拡大鏡を使いました」
公孫勝は、短い筒のような物を袖から取り出した。
「ほう、出来たのか」
「三月前に。両端の玻璃の玉を磨くのに苦労しましたが、十分物を拡大してくれます。この筒を大きくし、玻璃の玉の厚さを整えれば、戦の物見にも使えます。遠くのものが近くに見えるのです」
「さすがは墨家の後継者だのう。よくそのようなことを考えつくものだな」
「墨家だからではありませぬ。好きだからです。本当は戦には使いたくないのですが」
「あまいぞ、入雲竜。この者達のこれからを考えてみよ。僅かな仲間で宋と戦うのだ。宋という国は、腐りつつはあるが大きいぞ。足りない数は、知恵で補うしかないではないか。おまえは、戦うだけでなく、

知恵も出さねばならぬ。天魁の星の戦いは、突き詰めて言えば、おまえと天機の星にかかっているのだ」
「また、その話ですか。玄女様、私は天間の星などではありません。そんな力もないし、国と争う気もありません。私はただ、墨家の五千人がひっそりと暮らしていければよいのです。玄女様の夢、それは確かによいことだとは思います。ですが、その夢が叶うことはありませぬ」
「墨家は、少しでも望みがあればそれに賭けるのではなかったのか」
「万に一つも望みはありませぬ」
「そうかな。私はそうは思わぬがな」
公孫勝はそのまま黙ってしまった。今まで、何度も繰り返してきたことだった。いつも結論は出なかった。九天玄女の夢は分かる。いや、賛同している。出来ることなら民の幸せのために、国というものに異議を唱えたかった。天子という存在に、天誅を下したかった。たかが太祖趙匡胤の血をほんの僅か継いでいるというだけで、何故天の子なのだ、なぜ神なのだ。何故、民から平然と搾り取れるのだ。天の子とは、血や力で決まるものではないはずだ。それはただ、想いと行いのみで決まるはずのものだ。公孫勝はそう思っている。※天子　皇帝。
「さきほど、黄玉のことを天貴の星とか言ってましたけど。それは何なのですか。それに天魁の星とも」
雪華が遠慮がちに口を挟んだ。時折痛そうに顔を顰めるが、それほど苦にしてはいないようだった。
「おお、そうか。おまえにはまだ話していなかったな。これは私の夢なのだ。昔、私の父王安石が朝廷から身を退いた後、私は命を狙われてな、国中を逃げ回っていた時のことだ」
「なぜ命を」
「父のために、私は多くの者の命を奪った。人を殺した者は、人に殺されても仕方がない。その覚悟がなければ、人を殺してはならぬのだ」
「王安石様といえば、あの新法の」
「そうだ、私は娘だ。庶子だがな。父が宰相になった時、私は父を助

けたくて開封府に上ったのだ」※庶子　正妻以外の子。
「そこで、人を殺したのですか」
「始めの頃は、諜報と諜略だった。政敵の大物、司馬光の弱みや落ち度を嗅ぎ回ったり、味方の呂恵卿※や蘇轍※が寝返りはしないかとかな。そんなことをしていたのだ」

※呂恵卿　六代皇帝神宗の頃の高官。
※蘇轍　北宋後期の高官。蘇軾の弟。

「名は聞いたことがあります」
「だがな、父が新法を実行にうつす頃には、多くの廷臣が父に反対した。既得の権益を守りたいためにな。父の苦悩を見て、私はついに踏み越えたのだ。それがいいことなのかどうかは考えずにな。私は暗殺に走った。その頃は二百人ほどの部下を抱えていた。皆、諜報と暗殺に慣れた者達だった。大物本人を殺したら大事になる。そこで、本人に近い者を殺していった。今思えば、それが間違いだった。どんなに大事になって、自分の身が滅びようと、直接その当人を的にすればよかったのだ。周りの者を殺しても、悪い奴ほど平気な顔をしていたのだ。それに、後から分かったことだが、殺した者のなかには罪のない者もいた。だから、私が命を狙われるのは当然のことなのだ。生き長らえたのは、ただの偶然に過ぎぬ」
「天が、生きよと命じたのかもしれません」
　雪華は真剣な目をして言った。
　九天玄女はそれに応えるように、雪華の目を見て微笑んだ。
「そうして私は国中を放浪した。父から有り余るほどの銀を持たされてな。その銀には手をつけておらぬ。いつか、本当に必要とする者のためにと思ってな。私は父の命が心配だった。何人かの刺客はあったらしい。だが、今私の右腕となっている時遷の父が、総て退けてくれたらしい。父子とも、私と私の父によくしてくれた。父はその後、一度宰相に返り咲いたが、一歳もせず引退した。もう、父の出る幕などなかったのだ」
「その放浪の途中で」

「放浪といってもな、私にとっては少しも惨めなものではなかった。むしろ楽しかった。幼い頃から父の勧めで学問に打ち込み、世の中の本当の姿を知らなかった私には、総てが新鮮に見えたのだ。そこで民に触れ、民と共に食べて寝る。そんなことが私には嬉しかったのだ。麦の打ち方も習った。帽子の編み方も学んだ。色々なことを教わった。そして気付いたのだ。この国に朝廷はいらないとな。いらないのではない。いることが民を不幸にしているのだとな。今まで父や私がしてきたことが、とたんに愚かなことに思えてきた。父の新法とて、所詮朝廷の財政を立て直すためのもので、民の幸せを考えたものではなかった。国というのは、天子のものか民のものか。国というのは、土地か人か。私は考えた」

「民のもの、人のものだと思います」

雪華は、九天玄女の言葉に引き込まれていた。雪華の目は、じっと九天玄女に注がれていた。公孫勝はただ黙って聞いていた。

「天魁の星よ、私もそう思う。そう悟った時、私は夢を見たのだ」

「どんな夢だったのですか」

「あれは、京東西路の泰山※を下った時のことだった。泰山の南西にな、梁山湖という大きな湖があるのだ。地元の者は梁山泊と呼んでいた。泊とは浅い湖のことだ。その真ん中に、これも大きな島があってな、それは見事な景観だった。どうしてもその島に行きたくなって、地元の漁師に頼んで船を出してもらった。泊は葦が繁っていて、地元の漁師でさえ島に降りた者は少ないとのことだった。だが私は、何かに導かれるように島を目指した。そして島に着いて、私はそこで一夜を明かしたのだ。」※泰山　恒山、衡山、華山、嵩山と並ぶ五嶽の一つ東嶽。

「そこで夢を見たのですね」

雪華は、身を乗り出せないのがもどかしいようだった。

「そうだ、美しい夢だった。今でも鮮やかに覚えている。やはり春の初めでな、夜になると冷え込んだ。私は何も持っていなかったのでな、どこか寒さを凌げるところはないかと、島の奥を捜し歩いた。そして、

島の東に小さな祠を見付けたのだ。私は祠に入った。古く狭くはあったが、寒さを凌ぐには十分なものだった。私はその祠の中で泊をわたる風の音を聞いているうちに、いつしか眠りに就いた。そして、星の夢を見たのだ。それは、壮大な星の饗宴だった。天から降る星、地から湧く星、青い星、赤い星、眩い星、暗い星。色々な星が闇夜を明るく照らしていたのだ。それはまるで、漢表の中を漂っているようだった。私は心が洗われるような気持ちになった。そして、夢の中でとどめなく涙を流した。心がどんどん軽くなり、身体が宙に浮いたように感じた。心も身体も星の間を漂いながら、私ははっきりと感じたのだ。絶望してはならぬ、どんなに光の射さない闇夜でも、希望を捨てさえしなければ、星の輝きは必ず道を照らすだろうとな。朝を迎え、私は祠の外に出た。そして、祠の額を見た。九天玄女を祀った祠だった」

「そこから名を貰ったのですね」※漢表　天の川。

「それもある」

「その夢を見てから、玄女様は天の星、地の星を考え出したのですか。」

「そうだ、釈教で言う百八の煩悩。それに合わせて百八の星をな。天の星三十六、地の星七十二。それが私の考えた世直しの星だ」

「美しい夢だと思います。ですが、わたし達はそんな大それた者ではありません。ただの田舎者です」

「いずれ分かる時が来る。天魁の星よ」

「天魁の星……」

「その名の通り、さきがけの星だ。百八の星を統べる、最上の星だ」

雪華は笑い出した。あんまり笑ったので、傷の痛みに顔を顰めるほどだった。

「玄女様、戯れも過ぎます。わたしなんかに世直しなど出来るわけがありません」

雪華は真顔に戻って言った。

「いずれ、時来たれば分かる。出来る出来ないではないのだ。為そうと願う、その強い想いこそが尊いのだ」

「嬢さん。あんたはただの田舎者なんかじゃない」

勢いよく扉が開いて、李逵が汗だくのまま入って来た。
「李逵……何と呼べばいいかしら」
雪華は戸惑いの色を見せた。
「李逵。そう呼び捨てにすればいい。無用の頃と同じに。変に畏(かしこ)まられると、尻がむず痒くてかなわん」
「そうですか、それでは李逵と呼んでいいのですね」
「それが、一番座りがいい」
「済みませんでした。愚かなわたしのために、皆には大変な迷惑をかけてしまいました。李逵ももとに戻してしまいましたし」
「儂のことは気にせんでいい。もとの儂に戻っただけのことだ」
「黄玉が……」
「自分が望んでしたことだ。嬢さんが気に病む必要はない」
「あれだけ美しい娘なのに」
「黄玉は、身体に少々傷がついたってその美しさは損なわれん。黄玉のことだから、傷を勲章だと言って見せびらかすかもしれん」
雪華の顔に笑みが戻ってきた。李逵と話すと心が和(やわ)らいだ。傷付いた心と身体が、少しずつ精気を取り戻しつつあるようだった。

・・・・

「腕の傷はどうだ」
陳統が訊いた。
「どうってことないさ。こんな傷、唾(つば)をつけとけば治る」
晁蓋はそう答えたが、そんな程度の傷ではないのは、動きを見れば分かった。
「汚いな。俺が怪我をしても、おまえに唾をつけられるのは勘弁だ」
「何だと、誰がおまえなんかに」
「瑛姉ちゃんだったら嬉しいけどな」
「曹瑛か……。あいつあんなに綺麗だったっけ」
「何言ってるんだ。瑛姉ちゃんは前から綺麗だ。おまえは雪華姉ちゃ

んしか見てないから気付かないんだ」
「どうでもいいけど、そのおまえっていうのは止めろよな。俺は年上だぞ。少しは敬意を払え。なあ、石勇」
晁蓋は、十歩ほど離れた一の木戸で石積みをしている石勇に同意を求めた。
「どうでもいい、そんなこと」
にべもない答えだった。
「ちっ、面白みのない奴だ」
晁蓋はそう言って、自らは柵の補強に汗を流していた。
「どうしたんだ、晁蓋」
陳統が心配そうに訊いた。砦に着いてから、晁蓋の様子がおかしい。陳統にはそう思えたのだった。
「どうしたって」
晁蓋の声には苛立ちが感じられた。やはり変だ。陳統は確信した。
「おい、晁蓋。おまえ少しおかしいぞ」
「何がだ。俺はおかしくなんかないぞ」
晁蓋は、むきになって陳統に言い返した。
「そら、それだよ。何をそんなに苛立ってる」
「関係ねえよ」
晁蓋はそのまま背を向けて、陳統の言葉を拒絶した。
確かにおかしい。陳統はその理由が何かを考えた。だが、これといったものは思い浮かばなかった。まあ、いいか。陳統はそう思うことにした。晁蓋は所詮兄弟ではない。起兄ちゃんや瑛姉ちゃんとは違う。最後までここに残れとは言えなかった。それに、晁蓋は晁家村の保正を継ぐ身だった。自分達と一緒に、危険な目に遭わせることは出来ない。無関係な者にしてはよくやってれたと、陳統は晁蓋を見直してもいたのだった。
「陳統」
晁蓋が持っていた木槌を置いて、陳統を振り返った。
「どうした」

陳統は晁蓋を見て驚いた。晁蓋の顔は、すっかり自信のないものに変わっていた。
「あの、遼の呉乞買って奴。あいつ雪華を好きなんだろうか」
陳統はそうかと納得した。晁蓋が変になったのは、砦に着いてからではなかった。呉乞買を見てからだったのだ。
「さあな」
「おまえはあいつに会ったことがあるのか」
「いや、あの時が初めてだ」
「何であんな奴が出て来るんだよ」
「何でって」
陳統は答えに窮した。晁蓋が落ち込むのはよく分かった。呉乞買の印象は鮮やかなものだった。その強さも、その姿も。三旬の後半だとは思うが、精悍な美男だった。髭を蓄えぬ髡髪が、その美獣のような肢体によく似合っていた。※髡髪　頭頂部を剃った髪型。
「あいつが恋敵じゃ、勝ち目はなさそうだな」
晁蓋はとうとうへたり込んでしまった。
「そんなことはない……と思う」
陳統はそう慰めたが、それ以上は言葉をつなぐことが出来なかった。
「陳統、おまえはいい奴だな。おまえだけだよ。そうやって慰めてくれるのは」
確かに勝ち目はない。陳統はそう思った。公平に見て、晁蓋はいい男の部類には入ると思う。だが、それだけなら聞起の方がいい男だ。聞起が、遼の若い娘達の注目を浴びていたことは知っていた。確かにそうだろうと思えるだけのものを、聞起は持っていた。百人の娘がいたら、九十九人は晁蓋よりも聞起を選ぶだろう。ましてや呉乞買だった。勝ち目を考える方が不遜だった。
「まだ、あの呉乞買っていう将軍が、雪華姉ちゃんを好きだって決まったわけじゃないさ。そんなに落ち込むなよ」
陳統は口からでまかせを言った。呉乞買は、雪華姉ちゃんを好いている。初めて見た時から、それは明らかだった。

「そうか……そうだよな。あいつは遼の将軍だ。そんな立場の奴が、雪華のような田舎娘を好きになることなんてないよな。田舎者は田舎者同士、それが一番だ」

晁蓋が元気を取り戻したようだった。

陳統は開いた口が塞がらなかった。雪華姉ちゃんを、よくも田舎者呼ばわり出来たものだ。晁蓋が田舎者だと自分で言うのはいい。だが、雪華姉ちゃんをそう言うのは許せなかった。

「おまえは田舎者かもしれないが、雪華姉ちゃんは違うぞ。もちろん、田舎者が悪いってわけじゃないけどな」

「そうだな、ちょっと言い過ぎた」

晁蓋は素直に謝った。いつもの晁蓋ではなかった。よほど落ち込んでいるのだろう。陳統は少しかわいそうに思った。

「まあいい。そんなことより、これからの戦いを凌ぎきることだ」

「それはそうだ。雪華はまだ動けない。俺達が護らなきゃ」

「いつまでもくだらないことを言ってないで、さっさと手を動かしたらどうだ。もうすぐ昼になるぞ」

石勇だった。陳統は中天にさしかかりつつある陽を見上げた。風は止みつつある。今日中に砦の防備を整えなくては。陳統は流れ落ちる汗を拭いながら、柵の補強にとりかかった。